



筑摩世界文學大系

38

ドストエフスキー

I

小沼文彦 訳



筑摩書房

筑摩世界文學大系 38

昭和四十六年三月二十五日

初版第一刷発行

ドストエフスキー I

訳者 小沼文彦

発行者 竹之内静雄

発行所 東京都千代田区神田小川町二ノ八  
筑摩書房

郵便番号一〇一―一九一  
電話東京(二九一)七六五一  
振替口座東京四一二二三

印刷 三晃印刷 製本 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0397 (製品) 20638 (出版社) 4604

目次

罪と罰

小沼文彦訳 5

芸術家および思想家としての  
ドストエフスキー

ルナチャルスキー  
小沼文彦訳 417

解説

小沼文彦 426

年譜

436



ド  
ス  
ト  
エ  
フ  
ス  
キ  
ー  
I



## 罪と罰

### 第一部

一

七月初旬の、ひどく暑い時分のこと、ある日の夕方ちかく、一人の青年が借家人からまた借りしているS——横町の自分の部屋から往来へ出ると、なんとなく思いきりの悪い足取りで、K——橋の方へ向って歩き出した。

彼はうまく階段の途中でおかみさんと顔を合わせずにすんだ。彼の小さな部屋は高い五階建ての家のてっぺんの屋根裏にあった、住まいというよりもむしろ戸棚に近いものだった。一方、彼がおかみさんは、一階下の独立した家に住んでいたのだ、外へ出ようと思うとそのたびに、彼はどうしてもおかみさんの家の台所のわきを通り抜けなければならなかった。ところがそのドアはいつもたいてい階段に向って開け放しになっていたのである。そこで青年はそこを通り

抜けるたびにきまって、なにか病的な、おどおどした気持ちになった。彼はそんな自分を恥ずかしく思い、眉をひそめるのだった。すっかり下宿代がたまっていたので、彼女と顔を合わせるのがこわかったのだ。

と言つても彼がそれほど臆病で、いじけた男だったわけではなく、むしろその反対なくらいだった。だがいつの頃からか彼は、ヒポコンデリーに似た、いらいらとした張りつめた気分になつていた。彼はすっかり自分の思いに凝りかたまり、孤独な生活を送つていたので、下宿のおかみさんばかりでなく、誰とでも顔を合わせるのがこわかつたのである。彼は貧乏に押しひしがれていた。だがそうした苦しい境遇さえも最近ではあまり苦にはならなくなつていた。しなければならぬその日その日の仕事も、彼はすっかり投げ出してしまい、手をつけようとしなかつた。実のところ、たとえ相手がどんなことをたくらもうと、下宿のおかみさんなどはすこしも恐ろしくはなかつた。しかし階段の途中で立ちどまらされて、自分にはなんの用もない、愚にもつかない世帯じみた無駄話や、しつこい払いの催促や、脅し文句や、泣き言などをくどくどと聞かされた上、こちらはこちらで相手はどぐらかしたり、あやまつたり、嘘をついたり——いや、そんな目に逢うくらいなら、いっそのこと猫のように階段をすべりおり、誰にも見つからないように姿をくらます方がまだましであつた。

しかし、いったん往来へ出てしまうと今度は、

借りのある女と顔を合わせるのをこんなに恐れた自分に、彼はわれながらきよつとするほど驚かされた。

『あれほどのことを断行しようとしていくことに、こんなくだらないことにびくびくするなんて！』と彼は奇妙な微笑を浮かべながら考えた。『ふむ……そうだ……すべては人間の手中に握られて、それなのにいつも人間の鼻先を素通りさせてしまふ、その理由はただ一つ、臆病だからだ……これはもう公理といつてもいい事実だ……。ところで、人間がいちばん恐れているものには知らんや？ 新しい一步、自分自身の新しい言葉、これをなによりも恐れているんだ……。だがそれにしても、おれはあんまりお喋り過ぎるようだぞ。あんまり喋り過ぎるから、それでなんにもしないのだ。もつとも、なんにもしないから、それで喋りをするということにもなるかも知れない。しかしこのお喋りというやつを、おれはこの最近ひと月のあいだ、夜も昼もあの片隅で横になつて……昔話みたいなことを考えているうちに覚えてしまったのだ。それはそうと、なんだつておれはいま歩いてるんだらう？ はたしてあんなことがおれに出来るだらうか？ まじめな話だらうか、あれは？ まじめが聞いてあきれぬ。空想のため空想で、ひとりで楽しんでるだけの話じゃないか。玩具だ！ そうだ、なんのことはない、玩具なんだ！』

往来は恐ろしいほどの暑さだった。おまけに息苦しさ、行き交う人の群、どこを向いても石



灰、建築の足場、煉瓦、塵埃、それに別荘を借りる余裕のないホテルブルク人なら誰でもよく知りぬいている、あの一種独特な夏の悪臭——そういったものがみんな一つになって、それだけでなくも調子の狂っている青年の神経を、これでもかこれでもかと不愉快に刺激するのであった。市内のこの地域には特に多い酒場からただよって来る堪えがたい臭気、それに仕事時間中だというのにのべつに出くわす酔いどれの姿などが、こうした画面の胸の悪くなるような、物悲しい色調を、さらに完全なものにしていった。この上なく深い嫌悪の情が一瞬ちらりと青年のきやしゃな顔面をかすめ去った。ついでに言っておくが、彼は美しい暗色の眼と栗色の髪の毛をもったすばらしい美男子で、髪は中背よりも高く、ほっそりとしてスタイルがよかった。しかし彼はすぐに深い瞑想、いやむしろ一種の忘我状態とでも言った方がよいものにも陥ったように、もはや周囲のものには注意を払わず、また注意を払おうともせずに歩き出した。ただ時たま彼はなにかぶつぶつとつぶやいていた。それは今しがた彼が自分でも認めたように、独り言をいう癖によるものだった。そしてほかならぬその瞬間、彼は自分の考えが時おりこんぐらかり、またからだが非常に弱っていることを、自分でも意識した。もうこれで二日というものはほとんどにも食べていなかったのである。彼はひどい身なりをしていた。それはほかの者なら、たとえ慣れっこになつてはいる人間でも、こんなばろを身につけて昼日な外へ出る

のは、さすがに気がひけるだろうと思われるほどだった。もつとも、区域が区域だけに、このあたりで服装で人を驚かすことは難かしい話だった。なにしろ乾草広場は近いし、ある種の建物(い宿)は無数にあるし、それにとりわけ、こうしたホテルブルク中央部の町や横町に密集した職人や職工たちの巢になつてゐるというわけでも、どうかするとこのへん一帯の風景はさまざまに異様な人物で色どられることがよくあつた。それで異様な恰好をした人物に出会つたといつて、いちいち驚いては驚く方が不思議なくらいだつたからである。しかしながら青年の胸中にはすでに毒々しい侮蔑の念が積りに積つていたので、デリケートな、ときとしてはあまりにも若々しい、デリケートな感情の持主であつたにもかかわらず、彼は町なかへ出ても自分のぼろ姿など一向に恥ずかしとは思わなかつた。もつともある種の知合いとか、あるいは一般になんとなく顔を合わせたくない以前の友人とかに、行き逢つた場合はまた別問題である……。そのうちに、こんな時分に往来をどこへどうして運ばれて行くのかわからないが、ものすごく大きな運送馬にひかれた、大型の空の荷馬車に乗せられた一人の酔っぱらいが、通りすがりにいきなり彼に向つて「やあい、ドイツ帽子の兄ちゃん！」と呼びかけ、手で彼の方をさしながら、声いっばいにわめき立てた——すると青年は不意にびたりと足をとめて、発作的に自分の帽子に手をかけた。その帽子は山の高い、丸型の、ツインメルマン製のものだったが、もうす

っかりかぶり古されて、まるつきり人参色になり、どこもかしこも穴だらけ汚点だらけ、つばも取れてしまい、おまけに角がつぶれてこの上なく見苦しい恰好に横の方にひんまがつていた。しかしながら彼を捕えたのは羞恥の情ではなくて、まるつきり別な、むしろ驚きに似た感情だつた。

「どうせこんなことになるだろうとはわかつていた！」と彼はどぎまぎしながらつぶやいた。「こんなことになるだろうと思つてたんだ！なんといつたつてこれがいぢばんいけんんだ！いいい、こんな愚にもつかないことからありふれたつまらないことから、全計画がぶちこわしになることだつてあるんだぞ！なるほど、この帽子は目立ち過ぎる……。おかしいから、それで人目につくんだ……。おれのこのぼろ服には、どんな古い煎餅みたいなやつでも、どうしたつて学生帽でなくつちやいけななんだ、とにかくこんな化け物じゃ駄目だ。こんなのをかぶつてるやつなんか一人だつていやしない、一キロ先からでも目について、すぐに覚えられてしまふ……。肝心なのは、後で思い出されるというやつだ、そうなつたらすぐに証拠とくるからな。出来るだけ人目につかないことがこの場合必要なんだ……。小事、小事こそ大事だ……。いいか、こういう小事が常に万事をぶちこわすんだぞ……」

道のりは大したものではなかつた。自分の家の門口から何歩あるかということまで、彼はちゃんと知つていた。きつかり七百三十歩だ。大

いに空想の翼をのばしている時分、なんとということなしに彼は一度それを数えてみたことがあるのだ。そのころは彼は自分でもまだその空想を信じてはいなかった。そしてただその空想のもつ醜悪な、だが魅力にとんだ大胆さで自分を刺激していたのである。だがそれからひと月たった今では、彼はもう別の眼で見られるようになって来た。そして、自分の無氣力と不決断に對して、あらゆる自嘲のモノローグをくり返しながらも、いつの間にかその『醜惡』な空想を、相変らず自分で自分が信ぜられないままに、すでに一つの計画として考えることに慣れてしまっていた。現に彼はいまもその計画のテストをするために、こうして歩いてさえるのだった。そして踏み出す一歩ごとに、彼の心の動揺はますますはげしくなるばかりだった。

心臓のしびれるような感じと神経性の戦慄とを覚えながら彼は、ものすごく大きな建物の方へ歩みよった。建物の一方の壁はどぶ川に、もう一方は——街に面していた。この建物はぜんぶアパート式に小さな貸間に仕切られていて、あらゆる種類の職人——仕立屋、錠前屋、料理女、さまざまなドイツ人、自分のからだを売って生きている娘たち、下っぱ役人、その他いろいろな人間が住んでいた。そこで入るものと出て行くもので建物の二か所の門の下、二か所の中庭はいつもなかなかのにぎわいだった。ここには三人か四人の門番が勤めていた。ところがそのうちの誰とも顔を合わせなかったので、青年はひどく満足だった。そこで門からすぐに右

手の階段にそつと目立たぬようにすべりこんだ。その階段は暗くて狭い、『真梯子』だった。しかし彼はそんなことはすでに万事心得ていたし、研究すみだった、そしてこうした条件がすつかり気に入っていたのである。こんな暗いところならどんなに好奇心の強い視線でさえも危険ではなかったからだ。『いまからこんなにびくつくようでは、いざ実行といふときまでに本当になにか起つたら、いっついでどうするんだ？』と彼は、四階へ上りかけながら思わずそう答えた。ところがそこで、ある住まいから家具を運び出して来た兵隊上りの人夫たちに道をふさがれた。その部屋にはある家族持ちのドイツ人の官吏が住んでいたことを、彼はもう前から知っていた。『してみると、あのドイツ人はいま引越つたというわけか。すると、四階には、この階段の、この上り口には、自分のあいだ、ふさがっているのは婆さんの家だけということになるな。こいつはしめたぞ……万一の場合……』とまたしても彼は考えて、老婆の家のベルを鳴らした。ベルは銅ではなくブリキでも出て来ているように、弱い音を立ててがらがらと鳴った。こうした建物のこうしたアパート式の小さな貸間には、たいていどこでもこんなベルがついているものである。彼はもうこのベルの音などすつかり忘れていた。それでいまこの独特な音は不意に彼になにごとかを想い起させ、なにごとかをまさまざと思ひ浮かべさせたようであった……彼は思わずぎくりと身をふるわせ、今度はあまりにも神経が弱り切

っていたのである。しばらくすると、ドアがほんのわずかばかり開かれた。その隙間から女主人がいかにもうさんくさそうに客の様子をじろじろと見廻した。暗闇のなかにその小さな眼だけがざらざらと光ると、彼女は気を強く口で、大勢いっばいに開けた。青年はしきいをまたいで板壁で仕切られた暗い支間を踏み入れた。仕切りの向うは猫の顔のような台所になっていた。老婆は無言のまま彼の前に突つ立って、いぶかしそうに彼の顔を見つめていた。それは六十恰好の、意地の悪そうな鋭い眼と、小さな尖った鼻をもった、小柄な、ひからびたような老婆で、頭にはなにもかぶっていない。ただあまり白髪になっていない、その薄色の髪の毛には、油がこてこてと塗られていた。まるで鶏の足のような、細くて長いその首には、フランネルらしいぼろきれがまきつけられ、肩には、この暑いのに、すつかり切り切れて黄色くなつた毛皮のジャケットがぶら下っていた。老婆はひっきりなしに咳をしたり、唸ったりしていた。きつと、彼女を見た青年の眼になにか特別な表情が現われたのだらう、彼女の眼にもとつぜんまたものような猜疑の色がひらめいた。「ラスコーリニコフですよ、大学生の。ひと月ほど前にお邪魔したことのある」、もつと愛想をよくしななければと気がついたので、青年は軽く頭を下げて、急いでこうつぶやいた。「覚えてますとも、よく覚えてますとも、あなたのおいでになつたことは」と、老婆は相変ら

ずそのなにしに來たのだと問いつめるような視線を相手の顔から離さずに、はつきりとした口調で言った。

「実はその……またおなじ用件でね……」と老婆の疑い深いのに驚いて、いささかうろたえ気味でラスコーリニコフは言葉が続けた。

『しかし、ひよつとすると、こいつはいつもこんな風なのかも知れないぞ、この前おれが気がつかなかっただけで』と彼は不愉快な感じをいさながら考えた。

老婆はなにか考えこみでもしたように、ちよつとのあいだ押し黙っていたが、やがて脇の方へ身をよせると、部屋のドアを指さして、客を先に立たせながらこう言った。

「まあ、おはいんささいよ、あんた」

青年の通されたあまり大きくない部屋は、黄色い壁紙がはられ、モスリンのカーテンをつつた窓には幾鉢かのセラニウムが置かれていたが、折からの夕日を受けて、かつと明るく照らし出されていた。「すると、その時もきつとこんな風に日が差しこむに違いないぞ……」思いがけなくこんな考えがふとラスコーリニコフの頭にひらめいた。そして出来るだけ部屋の様子を研究し、記憶にとどめておこうと思つて、彼はすばやく室内のあらゆるものに視線を走らせた。だが部屋のなかには取り立てていへほどのものはなに一つなかった。家具といえは、みんなひどく古くさい、ぬえんじゅ製のものばかりで、ひどく大きな曲木まがきのよりかかりのついた長椅子、長椅子の前に置かれた楕円形のテーブル、窓と

窓とのあいだの壁面に置かれた鏡つきの化粧台、

壁ぎわに並べられたいくつかの椅子、それに小鳥を手にもったドイツ娘を描いた、黄色い額縁にはいつた安物の二三枚の絵——これが家具のすべてであった。部屋の隅のあまり大きくない聖像の前には、あかあかと灯明が燃えていた。ぜんたいとして非常に清潔で、家具も床も光沢の出るまで拭きこまれて、みんなてかてか光っていた。『リザヴェイェータの仕事だな』と青年

は思った。部屋じゅうどこを探しても埃ひとつ見つけることは出来なかつた。『因業な年寄り後家の家はどこでもこんな風にきれいになって

いるものさ』とラスコーリニコフは考え続けた。そして奥の小部屋に通ずるドアの前にかかつている更紗さらのカーテンを、好奇心にかられてちらりと横目でにらんだ。その部屋には老婆のベッドと箆へらが置かれてあるのだが、彼はまだ一度も中をのぞいて見たことがなかつたのである。

この二つの部屋が彼女の住まいのぜんぶだつた。「ところで用は？」と、部屋にはいると、相手の顔を正面から見ようとして、さつきとおなじように彼の真前に立ちどまりながら、きびしい調子で老婆は言った。

「質草しちそうをもつて来たんです、ほらこれですよ！」そう言つて彼はポケットから薄側の古い銀時計を取り出した。その裏蓋は地球儀にかたどられていた。鎖は鋼鉄製だつた。

「でも先の口ももう期限が切れていますよ。おといでちょうどひと月になるからね」

「じゃもうひと月ぶん利子を入れますから、も

うちよつと待つてください」

「さあね、あんた、待とうが、質草をすぐに流してしまおうが、そりゃわたしの気持ひとつだからね」

「時計ならたくさん貸してもらえろでしようね、アリョーナ・イワーノヴナ？」

「いつもろくでもないものばかり持つて来るんだね、あんたは、こんなものはいくらもやしないよ。この前は指環ひとつにお札二枚も貸してあげたけど、あれくらいのもなら宝石屋に行けば新しいのが、一ルーブリ半も出せば買えるんだからね」

「ひとつ四ルーブリほど貸してくださいよ、きつと受け出します。親父の形見なんだから。近く金を送ってくることにするんです」

「一ルーブリ半ですね、それに利子は天引き。まあそれでおよろしかつたら」

「一ルーブリ半だつて！」と青年は叫んだ。「どうぞご随意に」と言つて老婆は時計を返してよこした。青年はそれを受け取つたが、ひどく腹が立つたので、そのままもう帰ろうとしかけた。だがほかにはどこにも行くあてはないし、それにここにやつて来たのにはもう一つ別の目的があつたのだつたと気がついて、すぐに思い返した。

「貸してもらおう！」と彼はぶつきらぼうに言つた。

老婆はポケットに手を入れて鍵をさがすと、カーテンの向うの奥の部屋に姿を消した。青年は、部屋の中央にひとり取り残されると、この

時とばかり聴き耳を立てて推理をはたらかせた。老婆の箆音をあげる音が聞えた。『きつと、上のひきだしに相違ない』と彼は見当をつけた。

『すると鍵は、右のポケットに入れてあるんだ……。みんなひと束にして、鋼鉄の環に通して……。あのなかにいちばん大きい、ほかのより三倍も大きい、ぎざぎざのついた鍵が一つあるが、あれは、もちろん、箆の鍵じゃない……。して見ると、ほかになにか金箱か、長持みたいなものでもあるんだ……。いやこいつは面白いぞ。長持にはたいいあんな鍵がついているもんだ……。だがそれにしても、なんていうあさましいことだろう……』

老婆が戻って来た。

「いいですかね、あんた、ルーブリにつき利子は月一グリーヴナ(イカベ)として、ルーブリ半なら十五カベイカになりますからね、一か月ぶん天引きいたしますよ。それから前のルーブリの口について、おなじ割でもう二十カベイカ差し引きますよ。つまり、ぜんぶで三十五カベイカ。だからあの時計であんたの手にはいるお金は、みんなでルーブリ十五カベイカということになりますからね。さあ受け取ってくださいよ」

「なんだって！　じゃ結局ルーブリ十五カベイカか！」

「ええ、その通りですよ」

青年は別に争おうとしないで、その金を受け取った。彼はじつと老婆の顔を見つめたまま、すぐに帰ろうとはしなかった。まるでなにかま

だ言いたいことでもあるのか、したいことでもあるような様子だった。しかしはたしてなにを言いたいのか、なにをしたいのか彼にはそれが自分でもわからないようだった……。

「ことによるとねえ、アリヨーナ・イローノヴナ、二三日うちに、もうひと品もって来るかも知れませんかね……銀の……すばらしい……巻煙草入れなんですよ……友達のところから取り返して来たらすぐに……」彼はどきまぎして口をつぐんでしまった。

「そりゃそのときまたご相談に乗りますよ、あんた」

「じゃあさよなら……。それはそうと、あなたはいつもお一人のようですねえ、お妹さんはお留守ですか？」と玄関の方へ出ながら、出来るだけ無造作な調子で彼はたずねた。

「あのこになにかご用ですかね、あんた？」

「いや別ににも。ちょっと誤いてみただけですよ。あなたはすぐにそれだから……。さようなら、アリヨーナ・イローノヴナ！」

ラスコリニコフはまったくしどろもどろのていでそこを出た。その混乱は時とともにますますはげしくなっていくばかりだった。階段を下りながらも、とつぜんなにかに打たれでもしたように、幾度か立ちどまったほどであった。そしてやつのことで往來へ出ると、彼ははじめて口に出して叫んだ。

「ああ、なげけない！　なにもかもいっただいなのという汚らわしいことだろう！　しかも本当に、本当にこのおれは……いいや、これは愚劣

なことだ、これはナンセンスだ！」と彼はききぱりとした調子で付け加えた。「よくもまあこんな恐ろしい考えがおれの頭に浮かんだものだ？　だがそれにしても、おれのハートはよくもこんな汚らわしいことを許したものだ！　なによりもまず、汚らわしく、卑劣なことだ、醜悪だ、実に醜悪だ！……。それなのにこのおれは、まるひと月も……」

しかし彼は言葉でも叫び声でも心の動揺を表現することが出来なかった。彼が老婆の家へ向って歩いていたときから、すでに彼の心を押しつけ苦しめはじめていた限りない嫌悪の情が、いまではものすごく大きなものになり、はつきりとその正体を現わして来たので、彼はあまりの悩ましさに身の置きどころもない気持だった。彼はまるで酔っぱらいのように、行きかう人にも気がつかず、やたらに人とぶつかりながら歩道を歩いて行った。彼がやつとわれに返ったのはもう次の通りに来てからであった。あたりを見廻すと、とある酒場の前に立っている自分に気がついた。その入口は地階に立っている、歩道から階段で下りるようになっていた。ちょうどその時ドアを開けて二人の酔っぱらいが出て来て、たがいたもつれ合い罵り合っているが、通りへ登って来た。長くも考えずに、ラスコリニコフはすぐに下へおりて行った。それまで彼は酒場などへは一度も足を踏み入れたことがなかったが、いまは目眩はするし、その上やけつくような咽喉の渇きに悩まされていた。それに急にからだに力がなくなつたのも、一つは自

分が空腹なせいだろうと考えたので、なおさら冷たいビールでも一杯ぐうつと飲みほしたくなったのである。彼は暗い汚らしい片隅の、妙にべとつくテーブルの前に腰を下ろして、ビールを注文すると、むさぼるように最初の一杯を飲みほした。するとたちまち気分がすつと軽くなって、頭もすっきりとして来た。「こんなことはみんな馬鹿げきつたことだ」と彼は希望をいだいて言った。「なにももうたえることなんかありません！ 単に肉体的な不調にすぎないんだ！ たつたビールを一杯かそこら、乾パンをひととき齧つただけで——これこの通り、たちまち頭はたしかになる、意識ははつきりする、意図はしつかりしたものになって来るじゃないか！ ちえつ、揃いも揃ってなんてけちくさいことなんだ……」しかしこんな睡でも吐きかけたような軽蔑しきつた気持をいだいたにもかかわらず、彼は早くも急に恐ろしい肩の重荷を下ろしてもしたように浮き浮きした気分になり、居合させた人たちになつかしそうな視線を投げかけた。だが彼はその瞬間でさえも、この物事をよい方にとろうとする感受性もすべて、やはり病的なものであるということを、かすかに予感していたのである。

なった。後に残ったのは、ビールを前に腰を下ろした、町人風の、ほろ酔いかげんの男と、シベリヤ風の短い上衣を着て白い顎鬚あごひげをはやした肥った、体格のいいそのつれの男だった。そのつれの男はひどく酔いが廻つていて、ベンチの上でうとうとしながら、ときどき、夢うつつで急に指をならしたり、両手を左右にひろげたり、ベンチにねたままの恰好で、上半身を跳ね上げたりするのだった。そしてそのたびに歌詞を思い出そうとむきになりながら、次のようなほおばかしい歌をうたつていた——

まるまる一年やすみなくおれはかかあと寝てやった……  
 まるまる一年やすみなくおれはかかーあと寝てやーつた……

そうかと思うと、急に眼をさましてまた——

ポドヤーチエスカヤを通つたら  
 先のかかあに会つたよ……

だが誰ひとり彼の幸福をわけ合うものはいなかった。無口な彼の相棒は、こうした感興の発作をむしる敵意のこもつた不信の眼で眺めていた。そこにはもう一人、見たところいかにも退職官吏らしい男がいた。彼はひとり離れて席をしめ、注文した品を前において、ときどきぐつとひと口飲んで、あたりを見廻していた。彼もどうやら、やはりいくらか興奮している様子

だった。

二

ラスコーリニコフは人なかに出ること慣れていなかった。そして、前にも述べたように、ことに最近では、あらゆる人の集まりを避けるようにしていた。だが彼はいま急になにか人恋しい気持にさされた。彼の内部になにか今までにないようなものが現われ、それと同時に人間に対する渴望のようなものが感ぜられたのである。彼はまるひと月も続いたあの他をかえりみる暇もない憂悶と陰鬱な興奮にすっかり疲れはてていたので、せめて一分間でもいいから、たとえどんなところでもいいから違つた世界でひと息つきたかつた。それであたりの不潔なことなど気にもとめずに、彼はよろこんでこの酒場に腰をすえていたのである。

店の主人は別の部屋にいたが、どこからか階段づたいに、ちよくちよく店の方へおいて来た。その際まっさきに眼にはいるのは、大きな赤い折り返しをついた、油を塗りたくつたしゃれた長靴であった。彼は袖なしの胴着を着て、おそろしく脂じみた黒いサテンのチョッキをつけ、ネクタイなしの姿だったが、その顔はいちめん油でも塗つたように、鉄の錠前みたいに光っていた。スタンドの向うには十四ぐらいの少年と、もうひとり注文があると品物をはこぶすこし年下の子供がいた。細かくきざんだ胡瓜や、黒い乾パンや、魚の切身などが並べてあつたが、それらのものはひどい悪臭を放つていた。店のな

かは息苦しくじつと腰かけていられないほどだった。おまけにあらゆるものに酒の匂いがしみこんでいたので、その空気を嗅いだだけでも、五分もたつたらけっこう酔ってしまいそうに思われた。

この世のなかには、たがいに顔も知らない間柄でありながら、ひと目みただけで、口をきかないさきから、なんとなく不意に、いきなり興味を惹かれるというような、風変わりなめぐりあいがよくあるものである。すこし離れて席を占めていたいかにも退職官吏らしいその客が、ちようどそういつたような印象をラスコーリニコフに与えた。青年はその後などかこの最初の印象を思い浮かべて、それを虫の知らせであるときえ思つたほどである。彼は絶えずちらちらと官吏の方を見やつた。それはもちろん、相手の方でもしつこく彼の方を見つめて、どうやら先方でも話しかけてたまらならしく見えたからでもあつた。ところで酒場に居合わせただけのものに対しては、主人もその中に含めて、その官吏はいかにも常連らしい、さも退屈だといったような、それと同時に、身分といふ教養といふ話しかけるにもあたらなほほど低い人たちにでも対するやうに、妙に尊大ぶつた、いくらか軽蔑的な態度さえ見せていたのである。それはもう五十を越した、中背でがっしりした体格の、半白の頭に大きな禿のある人物だった。年じゅう酒びたしになっているために、その顔はむくんで黄色というよりはむしろ青味がかつた色になり、臍ははれぼつた、その奥には、

裂目のような、だが生き生きとしたいくらか充血したちっぽけな眼が光っていた。しかし彼はなににか非常に変わったところがあつた。そのまなざしには歓喜の色彩らしいものすら輝いていた。

「おそらく、思慮も分別もあつたに違いない——だがそれと同時に一種狂気じみたものもひらめいていたのである。着ているものはいえ、ボタンもなにもとれてしまった、古い、すつかりぼろぼろになつた黒い燕尾服だった。どうにかこうにか一つだけボタンがくつついていたが、どうやら礼儀を失うまいとするつもりらしく、彼はそれをきちんとかけていた。南京木綿のチョッキの下からは、汚れた、酒のしみだらけの、しわくちゃになつた礼服用のワイシャツの固い胸がとび出していた。顔は官吏風に剃刀があててあつたが、それもよほど前のことと見えて、濃い鳩色のこわい毛がもじやもじやとびかけていた。それに彼の物腰態度にも、実際、なにかいかにも官吏らしい手堅いところがあつた。だが彼は妙にそわそわと落着きがなく、髪の毛をかきむしつたり、ときどき濡れてべとべとしているテーパーに肘の抜けた両腕をつぼつて、悩ましそうに両手で頭をかかえこんだりするのだった。とうとう彼はまともなラスコーリニコフの顔を見つめて、大きな、力強い声で言葉をかけてきた。

「はなはだどうも、ぶしつけない話ですが、ひとつお話相手になつてはいただけませんか、どうかね？ お見受けしたところあまりはつとしてはおいでにならぬようですが、しかし私の経験

をつんだ眼から見ますと、どうもあなたは教育のある、酒類などにはなれておられないお方のように思われますのでね。私はつねづね教養、誠実さを兼ね備えた教養というものを尊敬しているものでして、自身も九等官の職にあるものです。マルメラードフ——こういう名前のものにして、九等官です。失礼ながら、あなたもお勤めでいらつしやいますか？」

「いいえ、勉強中です……」と、相手の妙に雄弁な言葉の調子と、あまりにも真正面から、ぶつつけに話しかけられたのにささか面くらつた形で、青年は答えた。つい今しがた瞬間的に、たとえ相手も誰でもいいから席を共にしたいものだと思つたにもかかわらず、さて実際にこうして言葉をかけられてみると、それを耳にしただけでいきなり彼は、いつもの不愉快な、いらだたしい嫌悪の情に襲われた。それは彼の個人としての存在に触れるか、あるいははちよつとでも触れようとする、すべての他人に対して感じる嫌悪の情であつた。

「して見ると、学生さんか、大学にいつていらした方ですね！」と官吏は叫んだ。「私はそうだろうと思ひましたよ！ 経験ですな、あなた、永年の経験のお蔭ですな！」と言つて得意そうに彼は指をいっぽん額にあてた。「学生であつたか、一通りの学問を終えられたお方ですな！ それではひとつごめんをこうむつて……」と言つて彼は立ち上ると、よろめくからで、自分の酒瓶とコップを引つつかんで青年のそばにやつて来て、すこし斜め向うのところに腰を下ろ

した。彼は酔つてはいたが、その話ぶりは元氣よく発音も明瞭で、ただときどきちよつとまごついたり、言葉をひつ張つたりするだけだった。彼もまたまるひと月も誰とも口をきかなかつたように、なにが貪欲とも思える調子でラスコーリニコフにとかひついで来た。

「ねえ学生さん」と彼はほとんど莊重ともいえる調子で口を切つた。「貧乏は罪にあらざと言いますが、これは真理ですな。深酒も善行でないことは、私もちゃんと心得ております。むしろの方がより真理なくらいですとも。しかし洗うがごとき赤貧となると、学生さん、洗うがごとき赤貧となると——これはもう罪悪ですな。貧乏なうちは、まだ持つて生まれた感情の高潔さというものを保つていられるが、洗うがごとき赤貧となると、誰だつてそうは行きませんよ。貧乏もそこまで来ると、棒で叩き出されるどころか、箒で人間社会から掃き出されることになるんですよ、これでもかというわけですね。しかしそれもつともな話で、貧乏も底をつくと第一でめえてめえを侮辱する気になりますからな。そこでまあ酒ということになるんですよ！とところで学生さん、ひと月ばかり前のごと、私の家内はレベジャートニコフ氏にさんざんになぐられました、家内は私などは比較にならない人間なのですぞ！おわかりですか？とところでもう一つおたずねしますがね、なにほんの物好き半分な質問ですが、あなたはニエヴァ河の乾草舟にお泊りになったことがありませんかかね？」

「いや、まだありませんね」とラスコーリニコフは答えた。「いつたいそれはなんのことです？」

「なあに実は、私はそこらやつて来たんですよ、しかももうこれで五晩めでして……」

彼はコップに一杯ついで、それをぐつと飲みほすと、考えこんでしまった。なるほど、彼の服や髪の毛までに、こびりついた乾草の葉がところどころに見受けられた。五日のあいだ彼が着替えもしなければ顔も洗わずにいたことは、明白だった。脂ぎった、黒い爪の生えた赤い手は、ことに汚れがひどかった。

彼の話は、どうやら、あまり氣乗りのしない注意ではあつたが、とにかく一同の注意を惹いたようであつた。スタンドの向うの小僧たちはくすくす笑いはじめた。主人はこの『愛嬌者』の話を聞きに上の部屋からわざわざ下りて来たらしく、大儀そうに、だがつたいぶつた様子であくびをししながら、すこし離れたところに腰を下ろした。マルメラードフがこの店の古くからの顔なじみであることは、明らかだった。それにいやに持つて廻つたようなその話つきも、おそらく、さまざま未知の人々を相手に度重なる酒飲みばなしをかむ習慣によつて、身につけたものに違ひなかつた。こうした習慣はある種の酒飲みにとつては必要欠くべからざるものになつてゐるが、中でも家できびしい取扱ひを受けたり、虐待されている連中には特に多い。それだからこそ彼らは飲み仲間のあいだで自分を正当であると認めさせようと心を砕き、また

出来れば尊敬さえもかち得ようと常に努めるもののである。

「よう愛嬌者！」と大きな声で主人が呼びかけた。「ところでおめえさんもお役人なら、どうして働かねえんだね、どうしてお勤めに出ねえんだね？」

「どうして勤めに出ないか、ねえ学生さん」とマルメラードフは、彼がそんな質問をした当の相手でもあるように、もつぱらラスコーリニコフに向つて主人の言葉を引き取つた。「どうして勤めに出ないかと言ふんですな？するとこうして私がないかと言ふのでなく……とを、いっこう氣に病んでいないでもおっしゃるのですかな？レベジャートニコフ氏が、ひと月ほど前に、私の家内をその手でなくつたときにも、私は酔つぱらつて寝ておりましたが、私はさらに苦しまなかつたでもおっしゃいますかね？失礼ですが、お若いの、あなたにはこんな経験がおありですか……ふむ……まあ早い話が見込みのない借金をしようとしたというような経験が？」

「ありますね……しかし見込みがないというのはい？」

「つまりどうにも見込みがないんですな、はじめからどうせだめだつてことがわかつてゐるんですよ。たとえはですな、その男は、そのいたつて善意にみちたこの上なく有用な市民は、どんなことがあつても金なんか貸しつてくはないと、前もつてあなたにははつきりとわかつてゐるとします、だつてなんでその男が貸し

ますかね、ひとつお伺いしたいもんで？ なにしろ先方じゃ、こっちが返さないことをちゃんと承知してるんですからね。だが同情心からでも貸してくれるだろう、とお思いですか？ しかし新思想を追いかけているレベジャートニコフ氏などは、先日もう説明してくれたくらいですからね。今日では同情なんてものは学問上でも禁じられていて、経済学の発達したイギリスではすでにそれを実行しているんです。さうだとしたら、まったくの話、貸してくれるわけはないじゃありませんかね？ ところがです、相手が貸してくれないことを前もって百も承知していながら、こちらはやっぱりのこのこと出かけて行く、そして……」

「なんのために出かけて行くんです？」とラスコリニコフは付け加えた。

「しかし誰のとこへも、どこにもほかに行く所がないとしたら！ だってどんな人間だって、せめてどっか行ける所がなくちゃ仕様がないうちやありませんか。なにしろどうしてもせめてどこかへ行かなくちゃならないというような、そんな場合がよくあるもんですからね！ 現に私のひとり娘がはじめて黄色いカード(探流癖)をもって出かけたときも、私もやっぱり外へ出かけたんですよ……(といるのは、私の娘は黄色いカードで食っていますうでね……)」と彼は、ちよつと不安そうに青年の顔を見ながら、括弧で挟むといたように付け加えた。「いやなんでもありませんよ、学生さん、なんでもありませんよ！」と彼は、スタンドの向うで、二

人の小僧がぶつと吹き出し、主人までがにやりと笑つたのを見ると、あわてて、だが見かけはいかにも落着きはらつて、すぐにこう言い切つた。「なんでもありませんとも！ あんなふう

に頭を振られたぐらいいじゃ、どきまぎすることはありませんや、もうなにかもみんなに知れわたっているんですからね、秘密はすっかりばれてしまつたんですから。だから私は軽蔑ではなく、へりくだつた気持でそれに向うことにしているんですよ。ご勝手に！ どうしてもご勝手に！ 『この人を見よ！』ですよ。ときに失礼ながら、お若い方、あなたにはお出来になりますか……いいや、そうじゃない、もっと強く、もっと適切な表現を用いればですな、お出来になりますかではなく、その勇気がおありになりませんか、いまこの私の顔をじつと見ながら、私が豚ではないとはっきり言い切るだけの勇気が？」

青年はひと言も答へなかつた。

「さてと」またしても部屋のかなに起つた忍び笑いの静まるのを待って、重々しい、今度は一段と威厳さえも加えた調子で、話し手は言葉を続けた。「さてと、私は豚なら豚でもいっこう差支えないが、しかしあれは立派な婦人ですぞ！ 私は獣の相を備えているが、カティエリーナ・イワノヴナは、私の家内は——佐官の娘に生まれた、教育のある婦人です。私はやくざ者で結構、すこしも差支へはありやしない。しかしあれは気高い精神と、教育によつて高められた感情にみだされた婦人なんだ。それにし

ても……ああ、あれがもうすこし私に同情をもつてくれたらなあ！ 学生さん、どんな人間にだって、せめて一か所くらしいは、ねえ学生さん、人並にいたわつてもらえる所がなくちゃやり切れないじゃありませんか！ ところでカティエリーナ・イワノヴナは寛大な心を持っていないが、どうも片寄つたところがありましてね……。そりやあれが私の髪の毛をつかんで引きずり廻すのは、この私を可哀そうだと思えばこそ引きずり廻すんだということは、私もよく承知しておられます(平然として私は繰り返します、あれは私の髪の毛をつかんで引きずり廻すんですよ、お若い方——と彼は、ふたたび起つたくすくす笑いを耳にすると、さらにもつたいぶつた様子でこゝろ裏打ちした)。しかしですよ、ああ、せめて一度でもいいあれが……。いや駄目です！ 駄目です！ こんなことはみんな無駄なこつた、言うだけやほというもんだ！ 言うだけやほというもんです……。私の思い通りになつたことも一度や二度じゃないし、人から同情されたことももう一度や二度じゃないんだから、しかし……しかしこれが私の本性なんだから仕方がない、私は生まれながらの畜生なんだ！」

「決まつてらあな！」とあくびをしながら主人が口を入れた。

マルメラードフは拳(こぶし)を固めて思い切つてテールをどんと叩いた。

「これが本性なんだから仕方がないさ！ いいですかね、いいですかね、学生さん、私は家内



の靴下まで飲んでしまったんですすぜ！靴じゃ  
ないんで、靴ならまだいくらか話がわかるかも  
知れませんが、靴下まで、家内の靴下まで飲ん  
でしまったんですからなあ！それからあれの  
やわらかい山羊の毛皮の襟巻もやつぱり飲んじ  
まいましたよ、以前ひとからもらったもので、  
あれの所有品でして、私のじゃないんですがね。  
あれはこの冬すっかり風邪をひいちゃって、咳  
をしだして、しまいいは血痰まで出る始末。子  
供は小さいのが三人もいるんで、カティエリー  
ナ・イワノ・ヴナは床を磨いたり、洗濯をした  
り、子供にお湯を使わせたり、朝から晩まで働  
きずくめ。なにしろ子供の時分から綺麗好きな  
生活に慣れていきますんでねえ。ところがあれは  
胸が弱くて、結核になりやすいたちなんで、私  
もそれが気になりましたね。なんで気にならな  
いことがありますかね。そして飲めば飲むほど、  
いよいよ気になる。私が酒を飲むのは、酒のな  
かに悲しみを求めるためなんですよ……。苦し  
みを倍にしたために飲むんでさあ！”そう言  
うと彼は絶望したようにテーブルの上に突っ伏  
してしまつた。

「若い方」とまた身を起しながら、彼は言葉  
を続けた。「私にはあなたの顔になにか悲しみ  
のようなものが読みとれるんですがねえ。はい  
って来られるとすぐ、私にはそれが読みとれた  
ので、それでいきなりあなたに言葉をかけたよ  
うなわけですよ。こうしてあなたに私の身の  
話をお聞かせするのも、そんなことをしなくて  
もなにかも知り抜いているそこらへんののら  
くら者に、いままら自分の恥さらしがいいたい  
からじゃなく、感受性に富んだ教育のある方を  
がしているからなんです。いいですか、私  
の家内は立派な県立の貴族女学校で教育を受け  
卒業式のときには県知事やその他の来賓の前で  
シヨールを手にしてダンスをごらんにいれ、ご  
褒美に金のメダルと賞状をいただいたほどの女  
なんですぞ。メダルか……いやメダルの方は売  
つぱらつてしまいましたよ……とつこの昔にね  
……ふむ……賞状の方はいまでもあれのトラ  
クの中にしてありますさあ、ついこのあいだ  
も家主のおかみさんに見せていましたつ。家  
主のおかみさんとはそれこそそのべつ幕なし喧嘩  
ばかりしているんだが、せめて誰かの前で自慢  
話をして、昔のしあわせな時代のことを話して  
聞かせたかつたんでしようよ。私だつてなにも  
とやかく言ひやしません、言ひやしませんとも  
なにしろあれにしてみればそれだけが思い出の  
種に残っているだけで、ほかのものはみんなど  
つかへ消しとんでしまつたんですからなあ！  
いや、まつたく、あれは欄が強く、ブライドが  
高く、負けず嫌いの女性ですよ。床は自分で洗  
つても、黒パンばかり齧つていても、人に馬鹿  
にされて黙つてるような女じゃありませんよ。  
だからこそレベジャートニコフ氏にだつて無礼  
な真似を許そうとはしなかつたわけです。それ  
でレベジャートニコフ氏が腹を立ててあれをな  
ぐつたときも、なぐられたためよりも、口惜し  
さのあまりあれは床についてしまつたくらいで

す。もともと揃いも揃って小さな、三人の子供  
をかかえて、後家でいたのを私が引きとつてや  
つたようなわけでした。先の亭主の歩兵將校  
とは恋愛結婚で、手に手をとつて親の家から駆  
も愛していた仲なんです。あれは亭主をとて  
に夢中になつて、やがては裁判にまで引つかか  
り、その中途で死んでしまつたんです。その  
男も晩年にはあれをよくなぐつたそうですが、  
あれもなかなか負けてばかりはいなかつたも  
んで、それについては私はしっかりと証拠もあ  
り、確かなことだとわかつていますよ。それな  
のにはあれはいまでもその男のことを想ひ出すと  
涙ぐんで、それに引き較べてといつも私を攻撃  
するんです。しかし私は嬉しいですよ、喜んで  
いるんですよ。せめて空想の中でも自分は昔  
は幸福だつたのだと思つているのがねえ……。  
そんなわけであれば、その男の死後三人の小さ  
な子供をかかえて、都を遠く離れた恐ろしい田  
舎に取り残されました。私も当時そこに住んで  
いたわけですが、親子のそのみじめな有様とい  
つたら、私もこれで随分いろんなことを見て来  
ましたが、それこそ言葉にもなにも言ひ現わせ  
たもんじゃありません。親戚のものにはみんな  
見はなされてしまひましたね。なにしろブライ  
ドの高い、べらぼうにブライドの高い女です  
からねえ……。そこでです、ねえ、学生さん、その  
とき私も先妻とのあいだに出来た十四になる娘  
をかかえたやもめでしたが、あれの苦しみを  
見るに見かねて、結婚の申込みをしたわけですよ。